



菅楯彦が追懐した明治初年の中之島と堂島

著者	米田 文孝
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	73
ページ	4-9
発行年	2016-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023821

菅楯彦が追懐した明治初年の中之島と堂島

米田文孝

1. はじめに

近代大阪画壇を代表する画家のひとりである菅楯彦（1878～1963）は、明治・大正・昭和の三代を駆け抜けた。楯彦は大和絵風の歴史画や風俗画、とりわけ、はんなりとした情趣ある大阪の風物を主題とした一連の作品で知られる。今回は作品に記される画讃の元号から、昭和15（1940）年に制作されたことがわかる、明治初年の大阪中之島・堂島周辺の旧観を描いた「中之嶋蛸の松」と「堂島田簀橋」の双幅を紹介し、そこに描かれた堂島や中之島周辺の旧観を中心に、往時の状況を勘案してみたい。

なお、この双幅を制作した時期、楯彦は還暦を超え62歳を迎えていた。24歳の時に国学・有職故実を学んだ鎌垣春岡から、万葉集を出典とする楯彦という号を授けられていた。紀元2600年を迎えた昭和15年、楯彦は「國の御楯」をはじめとする時局に即した国粹的な主題の作品を制作する一方、この双幅をはじめとする懐古的な作品の制作も行っていった。

2. 作品の概要

表装からみると、「中之嶋蛸の松」と「堂島田簀橋」は、ともに三段（大和）表具・幢襖^{どうぼく}で仕立てられており、軸先は象牙である。両作品は同寸の横幅一双であり、本紙は同寸（縦21.0cm×横31.0cm）の絹本著色である。楯彦の画風は細部に拘泥されない軽妙・簡潔な線描と、鮮やかな色彩の共存を特徴とする。しかし、

本作品は色紙とほぼ同寸法である小さな画面（651cm²）に雄大な風景を精緻に描き込んでおり、あたかも細密画を彷彿させる繊細な筆致で風景や人物を描画するなど、やや趣を異にした作風である。また、楯彦の作品は同名同工のものがあることを特徴の一つとするが、管見によれば、本双幅と同類の作品は見当たらない。

さて、双幅は共箱（二重箱）に収められ、匣蓋表には画題をその右側に「中之嶋蛸の松」、左側に「堂島田簀橋」と列記されている。匣蓋裏には「浪速御民楯彦」の墨書と、横書の白文方印「楯彦」（縦2.4×横2.3cm、『没後五十年菅楯彦展』図録印譜集〔以下同じ〕姓名印No.57、近藤尺天作、1923年以降）の落款がある。

また、「中之嶋蛸の松」の画面右端には「是浪花中之嶋明治初年旧観也余幼時屢過此澗眼底今猶存当時景觀今画以静追懐」の画讃があり、下端には関防印の白文方印「漱瑤泉」（縦1.05×横0.55cm、印譜集関防印No.19、河西笛州作、1932年以降）の落款がある。同じく、左端には「庚辰青陽浪速御民楯彦」の墨書と、縦書の朱文方印「楯彦」（縦1.05×横0.55cm、新出）の落款がある。「庚辰青陽」から本作品は昭和15（1940）年春、前記したように楯彦62歳の作品であることが判明する（写真1）。

つぎに、「堂島田簀橋」の画面左端には、「自堂嶋南畔隔玉江橋望中之島北涯誌曰元禄十一改堀江橋称玉江橋明治初年橋上遙仰見大阪城及荒陵塔」の画讃と、縦書の朱文方印「楯彦」（縦



写真2 「堂島田簀橋」



写真1 「中之嶋蛸の松」

2.0×横0.7cm、氏名印No.47、河西笛州作、1935年以降)の落款がある。また、画面右端下には「中之嶋蛸の松」と同一の関防印「漱瑤泉」の落款がある(写真2)。「玉のごとく美しい泉に口そそぐ」の意である「漱瑤泉」は、唐・李白の詩文によるものと思われ、楯彦の博識を示す一例である。楯彦は明治31(1898)年から山本梅崖の梅清処塾で漢学を学びはじめたが、その後も国学・有職故実を鎌垣春岡に学ぶなど、画業以外に幅広く古典を中心に修学した。

双幅には別途、絹本の短冊1枚が添えられている。この短冊(縦21.5cm×幅4.0cm)には「是明治初年浪花中之嶋北畔旧観而往時久留米藩蔵屋敷之浜也涯上老松称蛸之松右云田蓑橋向岸為堂嶋余幼時屢過此澁眼底今猶存当時景觀乃画以静追懐」と墨書されており、双幅と共通する関防印「漱瑤泉」の落款がある。

つぎに、双幅に描かれた「旧観」をみると、「中之嶋蛸の松」は久留米藩蔵屋敷を背にほぼ北方向、同じく「堂島田蓑橋」は玉江橋北詰からやや西方の人吉藩(肥後・相良氏)と臼杵藩(豊後・稲葉氏)の蔵屋敷の境界付近から、ほぼ東南東方向の視野を描いている。その視角は両作品とも約75°であるが、画面の周辺部をぼかして表現していることに対し、中央部の約50°は鮮明に描かれている。これは35mm判カメラにおいて人間の目で見た画角に最も近いとされている標準レンズ(焦点距離50mm)の画角約47°に近似している。この観点からも、楯彦がその幼少時、実際にみた景觀を如実に描いていることの証左の一つになろう。図版は、上記の両作品が描く視野を示したものである。



図版 「中之嶋蛸の松」と「堂島田蓑橋」の視野

3. 「中之嶋蛸の松」について

本作品は楯彦が画譜に記したように、その幼時にしばしば往来した中之嶋と、そのとき眼底に焼き付いた名松「蛸の松」を題材にした作品である。楯彦(幼名藤太郎)は鳥取県で生誕したが、父・菅盛南(大次郎)は陶器絵付指導のため姫路・赤穂へと移り、さらに大阪で襖絵専門の絵師となった。ときに明治14(1881)年、楯彦が3歳を迎えた年であった。楯彦は、作品にある画譜と短冊からその幼年期、中之嶋の堂島川北岸にあった「蛸の松」付近をしばしば往来し、脳裏に焼きついた商都大阪の中心部の景觀や印象を旧観として画像化し、「中之嶋蛸の松」として制作したことがわかる。

この蛸の松(多幸の松)は、元和6(1620)年から幕末まで11代続いた有馬氏の久留米藩(22万石・天保期)大坂蔵屋敷の浜にそびえ立っていた大樹老松である。その四方に伸びる枝振りが、海中を遊泳する鮪を彷彿とさせる樹形であるとして名付けられ、当時の風流人に愛でられた。『撰津名所図絵大成』(巻之十・蛸松の項)には、「同所の浜辺にあり。枝葉繁茂し、四面にたれて恰もたこに似たるを以て名とす。頗る大樹の名木なり。此辺すべて河岸にして景色もつとも絶勝なり」とある。

蛸の松の東隣に蔵屋敷を構えた広島藩(43万6千石・天保期)の浅野氏は、元和5(1619)年から幕末まで12代続いたが、広島城無断修築の罪を問われて改易された、前藩主の福島正則がこの松を植えたという伝承から、毎年10石の扶持米を与えてこれを維持した。

江戸時代、各藩は年貢米や所産物を販売するため、全国的な商業拠点である大坂や江戸、京都などに蔵屋敷を置いた。蔵屋敷は蔵米・貢租米を格納し、大坂では米切手(蔵荷証券)の売買所である北浜、次いで堂島の米市場に近い堂島川両岸に蔵屋敷が置かれた。大坂で建てられる米価は全国を目安として、「諸色相場の元方」といわれた大坂の商品相場の中心となっていた。諸藩の蔵屋敷は、白壁となまこ塀、蒼々たる松樹、藩の格式に応じた長屋門を備えており、独特の景觀を形づくっていた。

作品に目を転じると、画面には久留米藩蔵屋敷を背にして北方、堂島川南岸の雁木(階段状の船着場)上にそびえ立つ蛸の松を描いている。

その背後には、田蓑橋とその北詰、堂島南岸の家並みが描かれ、さらに遠方には北摂の山並み（箕面山まで約17km）が配されている。雁木の汀付近に釣り人が3人、鯊釣りでも楽しんでるのであるか。路上には東に向かう「棒手振り」と呼ばれる行商人や、樽の箍を転がし遊びながら進む丁稚、振り返る少女と手をつないだ女性が描かれる。また、西に向かう人びとには男性や邏卒（警察官）が描かれるが、注目できるのは左端部分に棒手振商人と対向して、行き違うように描き込まれている職人である。この職人が肩に担っているのは襖と想定でき、襖絵を専門とする絵師であった父・菅盛南の姿を配し、追慕の念を新たにしたいのかもしれない。

なお、幕末までは蛸の松を境に上流（東）側は本五分一町、下流（西）側は常案裏町と呼ばれていた。常案町と土佐堀川に架かる常安橋の名称は、淀川の改修や低湿地であった中之島の開拓に尽力した豪商、初代淀屋与三郎（常案）に由来している。江戸時代初期、二代淀屋个庵は土佐堀川に私費で淀屋橋を架けた。その南詰には淀屋の「屋敷百軒四方」と称された1万坪にも及ぶ屋敷が広がり、軒先から梶木町（現・北浜4丁目）付近で淀屋米市が開かれていた。

元禄10（1697）年、米市は堂島新地の開発とその繁盛策により堂島（現・北区堂島浜1丁目、新ダイビル付近）へ移転、享保15（1730）年には公許の堂島米会所に発展した。ここでは、正米取引（現物取引）と帳合取引（先物取引）の両者が行われていたが、整備された世界初の先物取引市場であった。

画面に戻ると、堂島川の川面には2名の水夫に操られる、10～20石積の小運搬船である上荷（茶）船が描かれている。上荷船は外航船から積み替えられた荷を吃水線低く満載して、上流に向かって遡る。この上荷船が往来する河川に面した蔵屋敷では、浜地（雁木）に沿って設けられた荷上場から直接、荷揚げした藩もあったが、水流に煩わされないことを目的に、蔵屋敷構内に入堀（御船入）を掘削して、荷揚げの便を図った藩もあった。久留米藩をはじめ、広島藩、鳥取藩、高松藩、鍋島藩などの諸藩がある。入堀の上部には、荷物を嵩高く積載した舁を効率よく構内に搬入するため、路面が高く太鼓状を呈した入堀橋が架けられた。この入堀橋は、

一般の人びとの通行も許していた。

現在、大阪歴史博物館に寄託されている「久留米藩大阪蔵屋敷絵図」（以下、久留米藩絵図）には、この蛸の松を堂島川（北）方向から描いた絵がある。この作品は天明元（1781）年、初代神崎屋宗兵衛が大坂鞆（京町堀）に海産物（三町）問屋として創業した合名会社神宗が、家宝として所有されてきたものである。四条派の画家である眉山玉震が、慶応3（1867）年に描いたものであるが、美術史的観点からはもとより、幕末期の蔵屋敷の様相を具体的に描出する資料として、経済史・風俗史的観点からも貴重である。当初は38図の紙本淡彩画に眉山玉震と玉手眉山誌の序文が添えられ、「御田祝」と題簽が付された画帖仕立てであったが、その後、屏風（六曲一双）に仕立て直されている。

その中で、蛸の松を描いた作品（縦27.5cm×横43.0cm）は、この屏風を調査された宮本又次氏により、「蛸の松と久留米藩蔵屋敷」と命題された（写真3）。画面の構成をみると、その中央部の雁木上面からそびえ立つ蛸の松の大幹、上方で分岐して川面に向かい垂下する大枝を描き出している。蛸の松の幹には、注連縄が掛けられている。その下、駕籠の供まわりが蔵長屋門を出るところが描かれているが、藩主有馬侯の大坂滞在の姿を描いている可能性もある。蛸の松の背景には久留米藩蔵屋敷の白壁が描かれ、蛸の松の枝振りを浮き立たせている。また、右端には蔵屋敷内へ通じる御舟入に架かる入堀橋（久留米橋）と、構内へ至る木門が描かれている。

この蛸の松は、あらゆる人に河岸絶景の第一として賞賛されたと伝わり、幕末期以降の浮世絵や地図、写真に記録されている。例えば、幕末の経済都市大坂の名所旧跡を主題とする『浪



写真3 蛸の松と久留米藩蔵屋敷

花百景』のひとつに、「蛸の松夜の景」(国員画)がある(写真4)。この『浪花百景』は、文久～慶応年間(1861～67)に刊行されたと推定されている。「蛸の松夜の景」は堂島川の船上、あるいは堂島南岸、田蓑橋の北詰付近から西南方向を眺望した構図で描かれている。

ここで「蛸の松夜の景」の画面構成をみると、その左端の雁木の上面から伸び立つ蛸の松の大幹、さらに分岐して川面に垂下する大枝を描き出している。蛸の松の背景には久留米藩蔵屋敷の白壁が描かれ、蛸の松の枝振りを浮き立たせている。画面の右端には、蔵屋敷の敷地内部へ通じる御舟入に架かる久留米橋が描かれており、その路面中央部の高まった上空には満月が煌々と輝いている。なお、大阪府立中之島図書館には画帖仕立て、和泉市久保惣記念美術館には冊子体で、菅橋彦旧蔵の『浪花百景』が所蔵されており、「中之嶋蛸の松」・「堂島田蓑橋」の制作時に参照された可能性がある。

また、安政2(1855)年に刊行された『浪華の賑ひ』中の「鮎姿(蛸の松)」は、堂島川の対岸から蛸の松と久留米藩蔵屋敷を描いたもので、北方からみた蛸の松の全貌がわかる。また、蔵屋敷のほぼ中央に掘削された御舟入に架かる入船橋(久留米橋)も描き出されている。この橋と蛸の松を玉江橋の方向(西南)から撮影した写真では、田蓑橋を遠望できる(写真5)。

後年に同様の画角で撮影された写真では、久留米橋の欄干が鋳物製になるとともに、路面が平坦に拡幅された橋に架け替えられており、もはや御舟入はその役割を終えていることがわかる。また、この写真の反対(西北)側、広島藩の御舟入に架かる入船橋を前に蛸の松を撮影したものでは、堂島川に架かる玉江橋が遠望できる(写真6)。田蓑橋と比較した場合、下流(西側)に架橋された玉江橋の橋脚は高く、中央部分の橋脚間を広げていることがわかる。これは嵩高く荷物を積み、ときには帆を掛けた上荷船の往来を容易にする工夫であろう。

なお、明治44(1911)年に刊行された『大阪地籍地図』では、すでに久留米橋や蛸の松の表記はなく、このときまでに蛸の松も伐採され、蔵屋敷への入堀も埋め立てられたのであろう。その後、久留米藩の蔵屋敷跡は大阪師範学校、中之島小学校と大倉商業学校、大阪大学本部・

歯学部へと、また広島藩の蔵屋敷跡は大阪医学部、大阪大学医学部へと順次、その敷地が利用された。

なお、蛸の松から東方向、旧肥後町(現在の中之島2丁目付近)の河岸にも、「売買の松」と呼ばれた名松があった。その枝振りが手を延べて物を売ろうという人の姿に似ており、旧堂島米市場の大川を隔てた真向かいにあることを由来として命名されたというが、この名松も蛸の松と同時期に、その姿を消したらしい。また、蛸の松から西方向、大阪高等工業学校前(旧玉江町1丁目)の堂島川南岸に、あたかも大空を飛翔する鶴の姿と見紛う「鶴の松」があった。



写真4 『浪花百景』中の「蛸の松夜の景」



写真5 蛸の松と田蓑橋



写真6 蛸の松と玉江橋

4. 「堂島田蓑橋」について

本作品は画讃に記されたように、堂島南岸から堂島川を跨いで堂島と中之島を結ぶ玉江橋と、その背後に広がる遠景を描いた作品である。画題である田蓑橋の名称は難波八十八島の一つ、田蓑島に由来すると伝える。田蓑橋は玉江橋の上流(東方)、約260m離れて架橋されている。玉江橋と田蓑橋は、幕命による河村瑞賢の治水事業に関連した元禄年間(1688～1704)の堂島開発により、新たに架橋された堂島五橋(上流東方から大江橋・渡辺橋・田蓑橋・堀江橋・船津橋)である。瑞賢はこのとき蓄髪して平大夫と改名していたが、安

治川や堀江川の掘削をはじめ、経済都市大坂の諸機能の維持・拡大を図る諸事業を進めた。

なお、楯彦の画讃にもあるが、堂島五橋の一つである堀江橋は元禄11（1698）年、堀江新地が造成され堀江橋が架けられたため、玉江橋に変更された。玉江橋という名称は、堂島川の上流で瓊（赤い玉）が発見されたため神霊として祭られたが、この珠玉の発見に因むという。宝永4（1707）年刊の地図「摂津大坂図鑑綱目」には、この名称の変更が反映されており、すでに玉江橋と表記されている。

楯彦の作品に目を転じると、その画面中央部左右に描かれた玉江橋は木造橋で、中央部が大きく膨らむ。堂島川の川面には投網を打つ屋形船と、菰巻きの荷を運ぶ上荷船の2艘が描かれる。橋上を行き交う人力車の後方の対岸には蛸の松、その遠方には大阪城が描かれている。また、画面の右後方には荒陵塔（四天王寺の五重塔）が見え、背後には生駒の山並みが、右端には二上山が描かれている。飛鳥時代に創建された五重塔はたびたび罹災・焼失した。楯彦が見た五重塔は文化9（1812）年に建立され、昭和9（1934）年の室戸台風で倒壊した（写真7）。

また、玉江橋の橋上からは、明治20（1887）年ごろまで、四天王寺の五重塔や大阪湾を往来する帆船、西摂の中山寺が遠望でき、大阪市中の不思議の一つに数えられた。『摂津名所図絵大成』（巻之十・玉江橋の項）には、「当橋は裏川五橋の内第四にあたり。川幅広く兩岸はすべて諸侯御蔵やしきにして、風景絶勝なり。殊更此橋上より、天王寺の大塔を正面に眺望す。所謂浪花の一奇観なり。」と記された。『浪華の賑ひ』（鮎俣）にも、同様の画讃が記されている。



写真7 楯彦が見た四天王寺の五重塔

また、久留米藩絵図の中にも、玉江橋を俯瞰して、蛸の松と東側の広島藩蔵屋敷と広島橋、西側の久留米藩蔵屋敷と久留米橋を描いた「玉江橋」がある（写真8）。橋面が湾曲する玉江橋の橋上では、袴を着けた武士が行きかい挨拶を交わす姿が描かれているが、蔵役人や留守居役、あるいは新年廻礼の有様を表現しているであろう。また、木橋である玉江橋の高欄や束柱、地覆、橋脚などの、その構造に関する詳細を知ることにも可能である。

この玉江橋から堂島の北岸に至り、蜷川（曾根崎川）を跨ぐ浄正橋の北詰に近接した西方に、かつて「逆櫓の松」と呼ばれる名松があった。逆櫓の松は、『摂津名所図会』（福島天神の項）によると、上福島橋爪町の杵本家別荘の庭にあったという。この場所は源義経と梶原景時とが逆櫓について論争した場所とされている。『平家物語』の文治元年（1185）年2月、讃岐の屋島に陣取る平家を討つため出陣する場面で、この逆櫓問答が記され、歌川国芳が浮世絵（木版・大判3枚続）として制作した。『浪花百景』中の「福しま逆櫓姿」（芳瀧画）にはその姿が描かれる。この画面では、堀に取り込まれた樹幹が地上高約2.5mで切断されている姿が描写されており、逆櫓の松はすでに枯死している（写真9）。その上部には腐食防止のため、小屋根で覆われている。小屋根の端部には注連縄が飾られ、5枚の絵馬が釣り下げられている。また、堀の上部には、逆櫓の松の由来を示していると推測できる扁額が掲げられている。明治20（1887）年頃に撮影された写真では、絵馬は堀にまとめて釣り下げられ、扁額も辛うじて掲げられている（写真10）。



写真8 「久留米藩大阪蔵屋敷絵図」中の「玉江橋」

この逆櫓の松が面していた蜷川の旧流路は現在、埋め立てられて道路となっているが、元禄年間には蜷川の南岸一帯には「堂島新地」が、

この逆櫓の松が面していた蜷川の旧流路は現在、埋め立てられて道路となっているが、元禄年間には蜷川の南岸一帯には「堂島新地」が、

この逆櫓の松が面していた蜷川の旧流路は現在、埋め立てられて道路となっているが、元禄年間には蜷川の南岸一帯には「堂島新地」が、

この逆櫓の松が面していた蜷川の旧流路は現在、埋め立てられて道路となっているが、元禄年間には蜷川の南岸一帯には「堂島新地」が、

宝永年間には北岸一帯に「北（曾根崎）新地」が誕生した。近松門左衛門作の浄瑠璃世話物の「曾根崎心中」や「心中天の網島」の舞台となった場所である。埋め立ての理由は明治42（1909）年、付近一帯を焼き尽くした大火、いわゆる「北の大火（天満焼け）」である。この大火により、蜷川の上流は瓦礫捨て場となり、明治末年までに埋め立てられた。また、下流部分も大正時代の終わりまでには埋め立てられ、蜷川はその姿を消した。

5. おわりに

「中之嶋蛸の松」と「堂島田簀橋」に遺された画讃と短冊には、これらの作品に込められた菅楯彦の思いが吐露されており、詩画一致の境地を示している。あわせて、明治初期の大阪中之島・堂島界隈の景観を復原するためにも、有益な資料を提供している。

画題の一つとなっている蛸の松をはじめ、鶴の松や売買の松など名松大樹が姿を消した理由には、社会構造の変化から庇護者であった蔵屋敷がその機能を失い、取り壊されたことがある。



写真9 『浪花百景』中の「福しま逆櫓姿」



写真10 逆櫓の松（明治20年頃）

さらに、大火がこれに追討ちをかけたものと推定できる。近世の大坂では、三度の大火と呼ばれる「妙知（智）焼け〔1724年〕」・「大塩焼け〔1837年〕」「新町焼け〔1863年〕」をはじめ、しばしば大火に見舞われた。中之島・堂島地区の罹災状況からみると、天保5（1834）年に堂島新地北町（現・北

区堂島中）より出火した大火があるが、文久3（1863）年に刊行された「国宝大坂全図」には、蛸の松らしき大樹が表記されていることから、焼損は免れたらしい。

しかし、明治44（1911）年に刊行された『大阪地籍地図』には、旧久留米藩蔵屋敷跡の大阪大倉商業学校と、旧広島藩蔵屋敷跡の大阪病院との境界付近の堂島川南岸には、蛸の松を挟んで設けられた旧久留米・広島藩の御舟入や入船橋、蛸の松の表記は見当たらず、『大阪地籍地図』の作成時までに御舟入は埋め立てられ、同時に入船橋も撤去された。蛸の松をはじめとする名松大樹は、明治42（1909）年の「北の大火（天満焼け）」後、その姿はすべて失われた。

もう一つの画題である橋梁をみると、耐用年数や鉄橋化による架け替え、明治18（1885）年の淀川洪水などによる流出、大火による焼失など、短期間でその姿を変えた。大大阪の経済力を背景に、現在は近代化遺産として登録有形文化財として保存・活用される名建築が次々と建てられ、菅楯彦が双幅を描いた昭和15（1940）年頃には大きく景観を換えつつあった。もはや、楯彦が幼少時、眼にした前近代的な景観は失われ、追懐の彼方に過ぎ去っていた。

【主要引用・参考文献】

暁鐘成1976、『摂津名所図会大成』（其之二）、柳原書店
 秋里籬嶋1798、『摂津名所圖會』、柳原喜兵衛
 倉吉博物館1997、『浪速の雅人 菅楯彦』、同博物館
 サンケイ新聞社1987、『写真集 おおさか百年』、同新聞社
 島田清編1986、『写真集大阪（下）』、国書刊行会
 菅楯彦顕彰会1973、『画聖 菅楯彦名作大成』、同顕彰会
 鳥取県立博物館2014、『没後五十年 菅楯彦展』、同博物館
 鶏鳴舎暁晴翁編1855、『浪華の賑ひ 三篇』、河内屋喜兵衛
 浪花百景刊行会1976、『浪花百景』、立風書房
 宮本又郎1977、『大阪の蔵屋敷と堂島米市場』『大阪春秋』13号、大阪春秋社
 読売新聞大阪本社社会部1985、『浪速写真館』、朋興社
 脇田修監修2015、『近世刊行大坂図集成』、創元社
 なお、画讃の読解では、関西大学文学部小倉宗氏にご教示を賜った。銘記して篤く感謝申し上げます。

博物館運営委員 文学部教授